

指導資料 教育相談 第144号

鹿児島県総合教育センター
令和5年4月発行

対象 小学校 中学校
義務教育学校 高等学校
校種 特別支援学校



“1人1台端末時代”の教育相談 —「こころ便ポチッと」を活用した児童生徒理解—

- ◆ 生徒指導の基本となるのは、教職員の深い児童生徒理解である。
- ◆ ICTの特性を踏まえて教育相談に活用することは、児童生徒の心身の状態の変化に気付きやすくなるとともに、児童生徒理解の幅の広がりや深まりにつながり、悩みや不安を抱える児童生徒の早期発見や早期対応が可能になる。

#心の健康観察 #児童生徒のSOS #児童生徒理解の深まり #ICTの教育相談への活用

1 はじめに

生徒指導上の諸課題について、学校においては組織的対応を基本としながら未然防止や早期発見・早期対応に取り組んでいるが、その状況や要因、背景は多様化・複雑化しており、重大化も懸念される。更にはコロナ禍において児童生徒の生活や環境が大きく変化したことで、不安や悩みを相談できない、もしくは従来とは異なる形でそれらが現れる児童生徒や、一人で抱え込んでしまう児童生徒がいる可能性を考慮しなければならない。このような状況を踏まえ、これまで以上に周囲の大人が児童生徒のSOSを受け止め、組織として関わり、必要に応じて関係機関等につなげて対応していくことが重要となっている。

しかしながら、児童生徒の相談のしやすさに関する意識を調査した結果によれば（図1）、教職員に「伝えることができている」、「まあまあ伝えることができている」と回答している児童生徒の割合は、「自分の嬉しかったことや楽しかったことなど」に比べ、「自分の悩みや困っていることなど」の方が少なく、児童生徒はネガティブな内容、困りごと

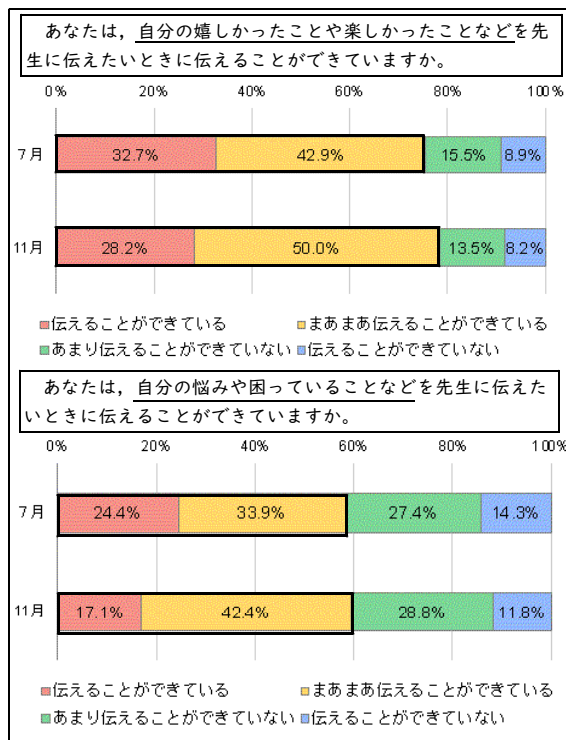


図1 児童生徒の相談のしやすさに関する意識（令和4年度調査研究研究協力校7校による調査結果）

について発信のしづらさを感じていることがうかがえる。そこで、児童生徒が悩みや困りごとも含めた自分の思いを発信しやすく、かつ教職員がそれに気付きやすくする手立てを工夫する必要がある、そのためにICTを活用すると効果的なのではないかと考えた。

2 ICTの活用「こころ便ポチッと」

「生徒指導提要（改訂版）」には、「ICTを活用することで、児童生徒の心身の状態の変化に気づきやすくなる、あるいは、児童生徒理解の幅の広がりにつながることも考えられ、悩みや不安を抱える児童生徒の早期発見や早期対応の一助になることも期待されます。」¹⁾とあるように、ICTを活用して得られた情報を児童生徒理解に生かしていくことは、その広がりや深まりにつながると思う。

そこで、児童生徒にとっては心身の状態、不安や悩みを教職員に伝える機会に、教職員にとっては児童生徒のSOSを受け止める機会にするために、1人1台配布されたタブレット端末を活用して毎日の「心の健康観察」を行うこととした。その際、「心の状態を伝えるお便り」として、また、ICTを活用して「ポチッと容易に」という期待を込めて「こころ便ポチッと」とネーミングした。

3 「こころ便ポチッと」による実践

(1) 「こころ便ポチッと」の概要

今回はアンケートフォームの一つであるMicrosoft Formsで「こころ便ポチッと」を作成した（図2）。鹿児島県内の教職員は県域アカウント（@kago.ed.jp）を使えば簡単に作成できるが、校内で活用している他のアプリ等を使って作成することも考えられる。

図2 「こころ便ポチッと（Microsoft Forms版）」

実施の流れとしては、児童生徒が自分の心身の状態等を、毎日、タブレット端末を使って入力する。児童生徒の回答はMicrosoft Excelのデータで表示されるため、教職員は回答を効率的に集約し、気になる児童生徒に声掛けをしたり、教育相談を実施したりするなど、個々の支援に活用できる。また、回答結果はデータで保存可能なため、教職員間で共有し、組織的な児童生徒理解や児童生徒支援に活用することができる（図3）。



図3 「こころ便ポチッと」の実施イメージ

このように、日々の児童生徒個々の状況や学級全体の状況を把握することにより、生徒指導上の諸課題の未然防止や早期発見・早期対応につなぐことができる。

(2) 「こころ便ポチッと」を活用した実践
令和4年度調査研究協力校が「こころ便ポチッと」を活用した実践について述べる。

ア 追加の質問項目の設定・工夫

心身の状態等を尋ねる質問（今回は「今日の気分を教えてください。」の1問）だけでも実施可能であるが、児童生徒の実態に応じて追加の質問項目を設定することが可能である。また、いつでも編集が可能なので、例えば、学校行事に関わる内容の質問を一定の期間だけ設定する等のアレンジも可能である。

以下、実際に効果的な活用がなされた追加の質問項目を紹介する。

【活用例1】

「朝食を食べて登校しましたか。」

（伊佐市立湯之尾小学校の実践より）

児童生徒の生活の場は学校だけではない。生活リズムや家庭状況の把握が児童生徒理解を一層深める場合がある。この学校では、回

1) 2) 文部科学省（令和4年12月）「生徒指導提要（改訂版）」
https://www.mext.go.jp/content/20221206-mxt_jidou02-000024699-001.pdf（2022年12月7日閲覧）

答結果を基に児童と語る中で、日常の観察では把握できなかった状況が分かり、保護者との連携につながった事例もあった。

【活用例2】

「自分の『いいね』を見付けることができましたか。」
「友達の『いいね』を見付けることができましたか。」

(伊佐市立田中小学校の実践より)

他の質問紙調査から学校全体の課題を「自己肯定感」と捉えた学校の質問項目である。毎日の取組であることから、児童の意識付けを図ることにつながった。さらに、教職員が個々の状況を捉えた声掛けや価値付けを行うことができ、児童理解を深め、それを基にした支援に活用することができた。

【活用例3】

「朝、誰とあいさつをしましたか。」

(伊佐市立本城小学校の実践より)

あいさつの状況から、気になる児童の教育相談を行い、その中で登校の様子や生活リズム等、他の様々な状況が把握でき、支援につなげた事例があった。児童にとっては回答しやすく、また、話題にしやすい質問である。必要な支援に気付くきっかけにもなり、児童の人的リソースやネットワークを生かした支援につながる質問と言える。

【活用例4】

「今日は何が楽しみで登校しましたか。」

(県立伊佐農林高等学校の実践より)

学校生活に影響が大きいと思われるモチベーションに関する質問を設定し、生徒理解に活用した。対面で話題にしづらい内容でも比較的質問しやすいのは、非対面によるアンケートのよさとも言える。

以上のように、追加の質問項目を効果的に設定することで、児童生徒理解をより深めることが可能になる。しかし、質問項目が増え過ぎると児童生徒、教職員ともに煩雑になり活用しづらくなることが懸念される。また、ICT活用で得られる児童生徒の情報はほんの

一部であるため、「こころ便ポチッと」で得られた情報を基に児童生徒と語り合うことが重要である。このことから追加の項目を設定する際は、児童生徒理解のきっかけとなるよう、心模様を尋ねる質問や客観的事実を尋ねる質問等、発達の段階も考慮した検討が必要である。

イ 組織的な支援への活用

「生徒指導提要（改訂版）」では、「教育相談はチームで進める」、「指導や援助の在り方を教職員の価値観や信念から考えるのではなく、児童生徒理解（アセスメント）に基づいて考える」²⁾ことが述べられている。児童生徒の「こころ便ポチッと」の回答はデータで集約されるため、教職員間で共有しやすく、またエビデンスに基づいた報告や共有に活用できる。

以下、データを組織的な支援に効果的に活用した実際の事例を紹介する。

【活用例1】

- ・ 回答データを全職員が閲覧できるフォルダに保存し、全職員で気になる児童を支援する体制を整えることができた。
- ・ 定例の職員連絡会で指導・支援の共通実践の在り方の見直しを全職員で行うことができた。

(伊佐市立南永小学校の実践より)

回答データの保存の仕方を工夫することで、担任以外の教職員も児童支援に積極的に関わった実践である。養護教諭が保健室来室時に声を掛けたり、休み時間の様子を観察したりするなど、担任以外の立場から多面的に支援することができた。また、定例で情報共有の場があり、支援に対する継続的なリフレクションを基に共通実践の見直しにつながった。

【活用例2】

- ・ 各担任が回答データを基に、児童と教育相談を行った。
- ・ 教育相談の結果等を基に「生徒指導事例研修会」で個々の児童の課題について、情報共有を行った。毎日の心の状態を把握でき、早期発見や早期対応に向けて組織的に対応することができた。

(伊佐市立菱刈小学校の実践より)

教職員の情報共有の場が報告のみに終始す

るという課題はないだろうか。生徒指導において、いわゆる事後対応が重要であることは言うまでもないが、それ以上に組織で行う未然防止の取組が大切であり、回答データから児童が「悩んでいる・困っている」段階で気付き、組織的対応につなげた実践である。ICT活用により児童生徒は相談しやすく、教職員は悩みなどをキャッチしやすくなる。また、データで蓄積されるために組織的な対応に活用しやすくなるとともに、これまでの状況等も把握しやすく、より個に応じた対応が期待できる。

ウ 個別の事例への活用

今回、「こころ便ポチッと」はMicrosoft Formsで作成したため、回答はネット環境にある端末であれば、どの端末でも可能である。このことを利用して、不登校傾向にある生徒と「どうにかしてつながりたい。」という思いからの実践を紹介する。

- ・ 「こころ便ポチッと」にアクセスするための二次元コードをカードにして、不登校傾向の生徒に渡した。
- ・ 「昨日は主にどこで過ごしましたか。」「今日のあなたのエネルギーはどれくらいですか。」「今のあなたの気持ちに合っているのはどれですか。（「〇〇さんと話してみたい。」「何か学習してみたい。」等の選択肢）」という質問を設定し、生徒へのアプローチの視点を少しでも増やせるようにした。

（伊佐市立菱刈中学校の実践より）

不登校児童生徒へのアプローチは状況に合わせて電話連絡や家庭訪問等、様々な方法が考えられる。この実践は不登校生徒とつながる窓口を一つ増やし、タイミングを逃さず支援することにつなげた学校の活用例である。しかも、生徒側から教職員にアプローチできる、また、自分の気持ちを教職員に伝えたいときに伝えられるチャンスになるという点に意義があると考えられる。この実践では、「何か学習してみたい。」「美術や技術・家庭等のものづくり等に興味がある。」という生徒の思いを知り、学級担任や教科担当と連携し

て、具体的な関わりをもつきっかけにすることができた。

(3) 「こころ便ポチッと」実施への留意点等

児童生徒が安心して回答できるよう、他の質問紙調査と同様に実施目的の説明や個人情報保護等の配慮が必要である。ここでは「こころ便ポチッと」がICTを活用していることを踏まえた留意点等について述べる。

非対面であるので、児童生徒は対面で伝えづらいことも伝えやすく、教職員は観察だけでは把握しづらい状況を把握しやすくなるため、具体的な支援につながりやすくなる点はICT活用のメリットである。しかし、対面のコミュニケーションと異なり、教職員が児童生徒の回答にアクションするのは回答直後とは限らないため、児童生徒が即応的な支援と実感しづらい場合がある。具体的かつ即応的な支援につなげるため、レスポンスのタイミングを意識し、「こころ便ポチッと」の回答データを基に一人一人に寄り添った声掛けや個別対応を行うなどの教職員によるアクションの在り方が重要である。

4 おわりに

教育相談において、ICTは児童生徒理解を深めるツールの一つであり、これまで教職員が実践してきたカウンセリングマインドを大切にしたい児童生徒支援をより充実させ得るものである。これまでの実践を土台とし、ICTの特性を踏まえながら活用することで、児童生徒理解の幅を広げ、児童生徒一人一人に寄り添った支援を展開していきたい。

－引用・参考文献－

1)2) 文部科学省(令和4年12月)「生徒指導提要(改訂版)」
https://www.mext.go.jp/content/20221206-mxt_jidou02-000024699-001.pdf 2022年12月7日閲覧

○ 平井聡一郎編著・監修「これならできる!学校DXハンドブック」2022年、翔泳社

(教育相談課 岩重 智美)

※ 本資料は、UDフォントを使用しています。